

◆特別講義①〔現代の図書館建築〕◆（講師：牛込 具之）

質問 1

興味深いお話ありがとうございました。新しめの参考文献を御推薦いただければありがたいです。

回答

こちらこそお聞きいただきありがとうございました。

「図書館建築」に関することではいいますと、直接的な回答になっていないので大変恐縮ですが、まず、気になる新しい図書館を体感していただくのが一番良いと思います。自ら体験していただき、そのうえでその図書館を成り立たせている仕様や性能、建築的な工夫などお聞きできるとなおいいます。もうすでにそのようなことを実践していらっしゃるれば、体験した図書館について、その建築的な評価や、社会的な評価を知っていただくというのもよいとおもいます。建築専門雑誌（図書館によくある専門雑誌としては「新建築」などがよくあると思います。）の掲載確認（設計者による説明が記載されていたりします。）や、グッドデザイン賞や各建築の賞の受賞実績などを見ていただいたり、その講評などをみていただくと、なにがどう評価されているかなど、図書館に対する最新の知見を知る手掛かりとなったりするとおもいます。そのような賞の講評などは、WEBに掲載されていたりします（グッドデザイン賞などは各年度の受賞履歴や講評が見ることができます。）のでそれらを見ていただくと新しい考え方に触れることができるとおもいます。

質問 2

コモンズという概念は今後の図書館の在り方にたいへん重要な考え方だと思います。私どものような23区内の中央館でない館のキャパシティでコモンズというスペースをどう捻出するか、アイデアがあればお聞かせください。

回答

ご理解いただきありがとうございます。

コモンズをスペースとしてだけ考えてしまいますと、どうしても既存の空間では捻出がむづかしいとおもいます。コモンズとは、共有地・入会地などにその意味の源流があります。一定の範囲の人々が自由に使用でき、果実をとり、薪を集めるなど、コミュニティデザインにおける原初のイメージがそこにあります。図書館でいえばまさに図書そのものが果実でと捉えられ、区民自らが、自由に活用できるコンテンツです。図書館におけるコモンズとはこれらコンテンツを活用しつつ、職員と区民、区民同士の様々なつながりを生み出す持続的な仕組みのある場であると思います。ここで、大切なことは、図書館におけるコモンズは、単なるスペースの話ではなく、「運用」が非常に大切であるということです。区と市民が共に創り上げる仕掛けや、直接的、間接的なコミュニケーションやつながりを誘発する図書館

ならではの接点をつくること、そこに持続的な役割を与えることなど（すでにやられているかもしれません。）小さなことでも十分に利用者の意識を変えていくことができるとおもいます。例えば、棚ひとつからでもコモンズ化（地域の区民の方々が、その知見を活かしたテーマで棚づくりに参画するなど、地域の価値の掘り起こし）するなど、区民がサービスの単純な受け手から、担い手へと参加する仕組みづくりの実践など、これからの施設の役割（一方的に与えるものだけではない共に成長していく）を考えることも必要な時代になってきているのかなと感じております。

質問 3

「見る・見られる関係」というキーワードを何度も使われているのが印象的でした。由来を知りたいです（それは誰の言葉で、どこの業界で、どんな文脈で使われているものですか？図書館外なのか、内なのか、佐藤総合計画のモノか牛込さん独自のモノなのか…と、とても気になりました）。また、図書館においてそれはどんな意味を持つのか、改めて端的に伺いたいです。

回答

ご質問ありがとうございます。これは、建築設計においては、図書館にかかわらず、設計者同士でよく使われるキーワードでもあります。社会が多様化する中で、機能が決められたスペースをどう配置するかという設計から、機能を決め切らず、多様な使い方を促していく設計へと設計の仕方も変化してきています。互いの活動を共有できること＝見る～見られるの関係という意味で使用していますが、そのような共有を促すことで、「コ・ラーニング」といわれるような他者の活動の仕方（学びの仕方）を共有し自ら実践することができるような仕掛けづくりが大切になってきているとここ数年実感をしているところです。内部同士、あるいは内外でのかかわり方に、様々な効果を与えることができると思います。千葉大アカデミックリンクでは、ガラスで囲われたグループ学習室と周辺のスペースとの関係などにおいて、互いの活動の「見る～見られる」を促す仕掛けをささやかに作りましたが、設計意図をくみ取っていただきつつ、図書館自らが施設運用における目指すべきコンセプトの一つとしてこの「見る～見られる」を促していくことが大切と標ぼうしております。そのような経験から、私個人としても図書館でこそ、この互いの活動を共有することの価値や大切さを学ばせていただき、図書館設計における大切なキーワードとして活用させていただいております。

質問 4

建築の実際を伺って、図書館に求められていることが具体的にわかりました。箱物の建築において、最終的に首長の強い信念と決断力が求められます。その方々を動かすのはなんなのでしょう。一館長としてどう動けば良いのでしょうか。

回答

自治体ごとに財政状況やタイミング、図書館の重要性が異なっておりますし、首長や自治体の目指す目標（総合計画など）もそれぞれ異なります。また、私の立場としては、施設の運営という側面ではなく、設計という側面でご協力する立場にあるため、なかなかご回答することがむづかしいことではあります。そのうえで、仮に新しい図書館をつくるという状況にあった場合を想定しますが、建築、あるいは建築設計に目を向ければ、時として、首長の強い思い、市民の思い、職員の皆様の思いに共感しうる建築を如何に提案できるかということも我々設計者の重要な役割となってきます。市長の思いにこたえられる設計者を選定すること（単にデザインの話ではなく、コストや環境、コミュニケーションなど様々な諸課題を判断すること）が重要だとおもいますし、そういった仕組み（入札など金額で設計者を決めるのではなく、「プロポーザル」など案や実績などを通して設計者を選定する仕組みがあります。）を活用することも一つの可能性です。設計者をうまく使いこなしていただき、首長や市民へ思いを届けることをしていただくことができるかどうか。ただし設計者も状況によっては、一方的な提案を押し付けることになりかねない、あまりよくない状況が生まれてしまう場合もあります。大切なのは、これからどのような図書館が求められるか、必要なのか、そのフレームづくりを図書館が主体的に関わり、これからの図書館の在り方を館長自らが、先導してまとめていくこと（他の施設＝芝生が青く見えがちですが、いまの図書館の良さを引き継ぎつつ、これからの図書館をどう考えていくか。借り物でない、地に足の着いた考えが非常に大切ですし、設計者と協働するうえで、設計の大切な手がかりになりますし、結果として、提案性を高めることにつながります。）が非常に大切であるように感じます。思いを形にすることは、非常につよい説得力を生み出します。